OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治期における清国向け日本陶磁器（1）
Author(s)	前﨑, 信也
Citation	デザイン理論. 2012, 60, p. 75-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53580
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治期における清国向け日本陶磁器（1）

前　﨑　信　也
立命館大学

キーワード
京都窯業，景徳鎮，輸出陶磁器，意匠
Kyoto ceramic industry, Jingdezhen, export ceramics, design

はじめに
１．日本陶磁器の外国向け輸出 ── 明治初期の京焼の動向を例に ──
２．清国市場向けの日本陶磁器
３．清国市場向け製品の種類
　３－１．日 用 品
　３－２．洋風飲食器
　３－３．中国古陶磁の倣製品
おわりに

はじめに

日本陶磁史は大陸の技術発展の後を追うように展開をしてきた。楽，仁清，乾山といった日本を代表するスタイルにしてみても，その誕生の背景が，唐物を念頭においての新たな選択肢の提案であったと考えれば，世界の陶磁史の動向，特に中国陶磁史を知らずして，日本陶磁器を語ることは不可能であると言える。しかし，歴史上たった二度，日本陶磁器が中国磁器を凌ぐほど大々的に海外に進出した時代がある。

まずは，17世紀から18世紀に生産された肥前の輸出磁器の時代。明朝末期の動乱で中国の磁器生産が衰えた時期に代替品として数多くの肥前磁器がオランダ人をはじめとする外国商人の手により世界各地に輸出された。ヨーロッパに今も多く残るいわゆる輸出伊万里のコレクションが当時の人気を現代に伝えている。

次に日本陶磁器が世界市場で成功をおさめたのは，1858年の開国から20世紀初頭にかけてである。明治から昭和初期にかけての輸出陶磁器に関しては，近代陶磁研究，ジャポニスム研究，万国博覧会関連の研究などで盛んに取り上げられてきた。そこでは主に明治期の陶磁器産業がいかに近代化，西洋化を果たし，欧米で享受されたかを解明することに重点が置かれた[1]。しかし，本論ではこの現象を国際的な視点から捉えた際に浮かぶある疑問について取り上げる。それは，なぜ日本陶磁器が，さほど大きな困難もなく，中国磁器を抑えて欧米市場に進出でき

たのかという問題である。この点については，その日本的な意匠が評価をされたという指摘を除けば，これまであまり疑問を抱かれてこなかった。更に，西洋向け輸出に注目するあまり，特にアジア諸国を中心とする，欧米以外に向けた陶磁器輸出についてはその実態が殆んど解明されていないといえる[2]。

本論はこの問題を明らかにするための一つの指標となる現象であると考えられることのできる，明治期に盛んに行われた日本陶磁器の清国向けの輸出について論じる。前半では明治期における日清間の陶磁交流を，そして後半では当時盛んに中国に輸出された日本陶磁器とはいかなるものであったのかを統計資料，歴史資料などを用いて明らかにする。明治期は全国各地の窯業地がある程度の共通性を持ちながらも，基本的には独自に発展をしてきたため，本論では筆者の専門分野である京都の動向を中心に述べるものとする。

１．日本陶磁器の外国向け輸出 ── 明治初期の京焼の動向を例に ──

幕末期に欧米諸国と締結・施行された条約により，江戸幕府はまずは神奈川（横浜），函館，新潟，長崎の４港を開港し，以降，日本の対外貿易は急激に発展したとされてきた。京焼に関していえば，輸出の試みは開国以前までさかのぼる。安政３（1856）年，京都所司代久貝正典（1806–1856），遠江守井上正信（1840–1856），和泉守浅野長祚（1816–1880）らが，粟田口の陶工丹山青海（1813–1887）に食器数千個の製造を命じ，江戸を経由して欧州へ輸出するという試みがなされたとの記録が残っている[3]。維新後の1871年には，京都の尾崎錦雲堂が粟田焼の陶器を外国人に販売したのが，開港して間もない神戸港から輸出された陶磁器の始まりとされている。翌年，京都の六代錦光山宗兵衛（1823–1884）と八代帯山與兵衛（生没年未詳，1861年家督を継ぐ）は外国向けの陶磁器を生産し，神戸港からの外国貿易に着手した。七代錦光山宗兵衛（1868–1927）は，父である六代錦光山宗兵衛が外国貿易を始めた経緯について「明治の初年頃，米國人でムいましたか，一人參りまして，未だ言葉も分らぬ時分でムいますが，兎も角亡父と談じまして，亡父はかねての計畫を述べ，また製品をも示し，こゝで初めて外國貿易に着手しようとの意思を確(ママ)かめました」[4] と振り返っている。その後，外国向けの陶磁器に京焼の陶家は積極的に進出する。錦光山，帯山のほかにも，十五代安田源七（生没年未詳），丹山青海他多くの粟田口の陶家，そして，清水五条坂界隈では幹山伝七（1821–1890）等がその流れに従った。結果として，京都の海外向けの売上高は1872年に国内向けの売上高を抜き，1877年から急激な伸びを記録したのである。

このように，粟田口の陶家を中心に京都の諸陶家が積極的な輸出陶磁器生産に傾倒していった要因の一つと考えられるのは，1869（明治２）年の東京奠都である。明治天皇及び，多くの皇族や公家が東京に移ることとなり，京都の市中では，産業の行く末を憂い，奠都に反対し

た西陣の職工を中心とした人々が「おせんど参り」を敢行した。東京奠都の余波は，西陣の織物に限らず当然の如く京都の高級陶磁器への需要にも影響をもたらした。

京焼諸陶家の生産体制は，1870（明治３）年に酸化コバルト，1876（明治９）年に上絵付に用いる西洋顔料が導入されるなど，欧米向け陶磁器の生産のために様々な変化を遂げた[5]。また，それまで比較的小規模であった工房の規模を大幅に拡大することにより，生産額の増進が計られた。1882（明治15）年頃から始まった松方デフレを契機とする不況により，倒産の憂き目にあった陶家も少なからずあったが，不況を耐えきった窯元は引き続き生産体制の拡大を進めた。1890年頃，京都で最大の生産高を誇った錦光山窯は200人あまりの職工を雇用し，年間約30万個の陶磁器を生産していたと記録されている[6]。

２．清国市場向けの日本陶磁器

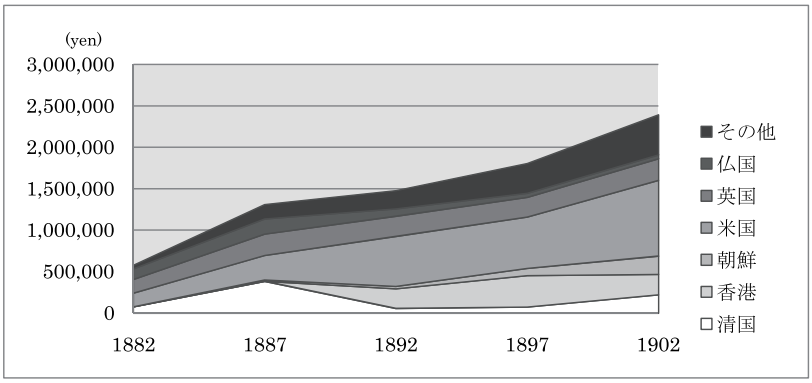
1871年，大蔵卿伊達宗城（1818–1892）と直隷総督李鴻章（1823–1901）は日清修交条規に調印した。そして，1873（明治６）年の批准書の交換により，横浜と神戸は公式に対清貿易のために清国商人に開放された。清国は日本と通商条約を交わした17番目の国であったが，日清貿易は両国間の物理的な近さもあり順調に拡大してゆく。

京都の陶業者の多くが明治初期より欧米向けの陶磁器生産に着手したことは先行研究でこれまで盛んに述べられてきた通りである。そして，同様の動きが全国各地の窯業地で興り，多種多様な日本陶磁器が欧米諸国に盛んに輸出された。しかし，本論稿で取り上げる清国も輸出陶磁器の相手国として到底無視できない存在であった。なぜなら，統計資料によると清国向けの陶磁器輸出額は明治中期以降，欧米を凌ぐ程に増大しているからである。その輸出額が伸びをみせはじめたのは，松方デフレの影響で欧米向けの輸出額が一時期急激に落ち込んだ丁度その頃である。（表１）では日本の全輸出額を目的地別に表示した。1882年の時点で中国に輸出された陶磁器は既に７万６千円以上，その年の全陶磁器輸出高のおよそ13パーセントにあたる。５年後の1887年にその額は38万５千円を超え，一時的に清国は日本陶磁器の最大の貿易相手国となった。日清戦争に伴い一時落ち込んだ清国向け貿易であったが，終戦後には回復し，20世紀初頭には全輸出高の１割にまで回復している。また，1892年以降，清国と香港に分割されたが，両方面に輸出された額を合わせれば，その輸出額は米国に次ぐ額を常に保っている。

1892（明治25）年の官報において，在天津副領事であった荒川巳次（1857–1949）は，後に当時の天津における日本磁器の商況報告を行っている。

> 當國［清国］ニテハ従来江西景德鎭ヲ以テ最大ノ磁器製造地トシ曾テ給ヲ他國ニ仰キタルコトナカリシニ（偶々外國品ノ輸入アリシハ外國人ノ自用ニ係リ支那向ノモノニアラス）

（表１）日本陶磁器輸出先別輸出額



畑智子「明治期の工芸品をめぐる輸出振興政策について」『賀茂文化研究』第５号，1997年，pp. 46-7の表を元に作成。

明治十六七年ノ交始テ本邦磁器，湯呑，茶碗，小花瓶，蓋物，皿，丼等上海ヲ經テ輸入セリ當時支那人ハ箇々珍奇美麗ニシテ其割合ニハ價直甚タ低廉ナリト稱シ先ヲ争ヒテ購買シ數月ヲ出テスシテ露店村舗若クハ内地僻遠ノ都邑ニ日本磁器ヲ見サルハナク爲ニ江西製ヲ取扱ヘル商人等ヲシテ窃ニ前途ヲ憂慮セシムルニ至リシ[7]

松方デフレ中頃の1883（明治16）年頃に，本製の磁器製品が上海を経由して天津に輸入され，その品質と低価格で人気を博したというのである。特に荒川が駐留した天津のある北清地方は，清国国内の磁器生産を一手に引き受ける景徳鎮から遠く運搬費が余計にかかる[8]。上海を経由した日本製磁器であっても安価に感じられた原因がそこにあったのであろう。

この４年後の1887（明治20）年，輸出磁器の製造を目的に設立された京都陶器会社の発足にさいし，画家の内海吉堂（1852-1925）はその運営方針に関して「磁器製造販路私説」と題した提言を行った。内海はこれに先立つ1877（明治10）年から５年間をかけて蘇州，杭州，上海を漫遊したことで知られるが，彼による清国の磁器生産の現状と，清国貿易に関する意見は以下である。

清国モ巨大ノ版図ナレトモ原ヨリ自国ノ磁器人員ニ給スルニ足ラス加之三十年前長毛賊ノ乱ニ全国ノ七分ヲ灰燼トナシ古来精工ノ磁器ハ僅カニ王侯貴人ノ中ニ一三ヲ存セリ現今新製ノ磁器ハ日本ノ精工品ニ不及乁遠ク且各處ニ於テ土器ヲ製シテ以テ磁器ノ不足ヲ補ヘリ［中略］清国ハ最近国ニシテ旅行運輸一切ノ費用ハ欧米ニ比スレハ四分ノ一ニシテ足ル可シ是レ余カ専ラ清国貿易ヲ主張スル所以ニシテ輿論ノ益ス清国ニ傾向スル[9]

ここで内海が清国向け輸出を推奨する理由は，清国への輸送費は欧米輸出よりも遥かに安価であること，そして，ここで「長毛賊ノ乱」とされる「太平天国の乱」以降，清国では自国の需要に必要な磁器製品を生産できていないことである。

日本の窯業関係者にとって清国市場への興味がピークに達したのは日清戦争以後の事である。1898（明治31）年，農商務省が日清貿易拡張のために清国商工業視察員を派遣した[10]。この視察員を嘱託した京都陶磁器試験場所長藤江永孝（1865–1915）は，視察後の報告で清国国内の磁器の需要と供給について触れている。

> 現今清國四億の人民が需要する磁器は日本より輸入するの外總て其供給を内地唯一の磁器製造地なる景德鎭に仰ぎ居れる［中略］清國に於ける磁器の需要は一カ年三百萬圓に對し景德鎭磁器の産額は一カ年凡そ二百五十萬圓なれば詰り清國産の磁器は殆んど皆内地の需要となり他所へ輸出せずと云ふも過言にあらず[11]

内海，藤江の言に共通するのは，当時清国の磁器生産が国内需要に応じることができないほどに落ち込んでいたという指摘である。

清朝磁器は17世紀から18世紀にかけての，康熙，雍正，乾隆帝の治世下で隆盛を極めたとされている。明の万歴年間に一度は閉じられた官窯が康熙期に再開され，清王朝の庇護の下，多種多様の陶磁器が製作された[12]。しかし，19世紀に入ると，度重なる戦禍により国力は衰退し，それにつれて磁器製品の質も徐々に低下をした。特に，1851年に勃発した太平天国の乱の後，景徳鎮を有する江西省は，太平天国軍の支配下に入るなど混乱の渦中にあり，景徳鎮の磁器は質量共に急激に後退した。そして，19世紀後半は中国国内全土からの需要には答えられないほどに不足していたのである。

日本の欧米諸国に対する輸出貿易の門戸が開かれたのは明治初頭のこと。つまり，清朝磁器の供給不足こそが日本の貿易陶磁器の伸張，及び，日本陶磁器の清国への輸出と密接につながっていたと考えられるのである。明末清初に肥前磁器がヨーロッパに輸出された頃と同様，中国磁器は世界全体で品薄の状態にあった。それこそが，19世紀末に日本陶磁器が欧米向けを含めた海外輸出で成功を収めることのできた重要な一因であった。

3．清国市場向け製品の種類

窯業技師であり，日本窯業の近代化に勤めた北村弥一郎（1868–1926）は1907年１月から５月にかけて清国の窯業実態の調査を行った。調査報告によると，1902年に日本から清国に輸入された陶磁器は全輸入額の47パーセントを占める。この額は，全欧米諸国からの輸入額を

合わせた額（約25パーセント）をも凌いでいる。また，北村によると第２位の輸入元である香港からの輸入品の少なくとも半分は日本製品であったとある[13]。したがって，直接清国本土に輸入された製品と，香港を経由した製品をあわせると，清国に輸入された全陶磁器の６割以上が日本製品であったことになる。

さて，このように明治期に日本から大量に清国に輸出された陶磁器はどのような製品だったのだろうか。残念ながら，中国の陶磁器コレクションに多くの日本陶磁器が含まれているという報告はこれまであまり見られない。そこで文献資料から，当時どういった陶磁器が日本から清国に輸出されていたかを探ってみたい。

先述の荒川報告によると1887（明治20）年から1891（明治24）年に天津に輸入された日本陶磁器の85パーセントが粗品で，残りの15パーセントが精品であるとしている[14]。残念ながら，この報告には粗品と精品の定義が示されていないが，安価で粗雑な製品と，高価で品質の高い製品の２種類が輸出されていた。清朝向け製品のこういった傾向は20世紀に入っても同様であったようで，1906年に清国の商況を調査するために渡清した，明治を代表する窯業技師の塩田真（1837-1917）も，「清國は上下貧富の度合甚しければ上等下等の二品として中等品は先不用のかたなり」[15] と同様の報告を行っている。では，次に，清国に輸入された製品３種に区別して述べたい。

３－１．日 用 品

1905年，天津在住の記者である井上孝之助（生没年未詳）は中国北部における日本陶磁器の商況について述べる中で，「日本の陶瓷器が何品を問はず支那に於て追々販路を擴張し得らるゝならんも其尤も容易に使用せらるゝものは先づ日用品なるべし」[16] と，その中心になるのが日用品の類であると述べている。ではこういった，一般的な陶磁器は日本のどの窯業地の製品だったのだろうか。

1892年の荒川の報告によれば，天津の萬聚魁という陶磁器問屋は，天津に本店，神戸長崎に代理店を持ち，肥前，尾張製の磁器を扱っていると述べている。また，萬聚魁は清国国内の需要を分析して見本をつくり，日本に発注をしているとする[17]。つまり，欧米向けの作品と同じように，1890年代には既に中国人の嗜好を取り入れた作品が日本で受注生産されることもあったようである。

井上が，日本製品の産地について言及するところによると，輸入されている主な製品は，岐阜産の皿，飯碗，酒盃，萬古焼の急須，淡路焼の蓋物，粟田焼の花瓶等であるという。また，清国向けに製作されているのは岐阜産のみで，その他の製品は日本国内で販売されているものと同じであるとし，清国向けの岐阜産の磁器は質が非常に悪いとも述べている。

北村も同様に清国向けの輸出について述べている。それによれば，1906年に清国に輸出された陶磁器の半数は美濃の製品であるということである。美濃と瀬戸の製品が全体の約８割を占め，そのほかは，伊予[18]と肥前の製品であるとする。他にも，淡路焼，萬古焼が輸出されているようである。京都や，薩摩，九谷の製品も輸出されてはいるが，極めて少ないと報告している[19]。

日用品であるとされてはいないが，1899年の『大日本窯業協會雑誌』掲載の記事には，「支那と稱するは北清地方（山東省より以北遼東半島迄）を云ふ者にして此地方へは佐賀長崎地方の産出品を輸出し居れり又香港とは廣東厦門等の南清各地と南洋諸島を云ひ此地方へは濃尾品の輸出最も盛んなり」[20]と，北清地方には肥前磁器，南清地方には濃尾品，つまり岐阜，愛知の作品が多いとされている。

これらの資料により，1890年代から20世紀初頭にかけて清国に輸出された陶磁器の多くが，美濃と瀬戸製の一般的な磁器製品であったと推定できる。そして，そのデザインについては特別に注文されることもあったが，多くは日本で国内向けに生産されているものに変更を加えることなくそのまま輸出したことがわかる。

３－２．洋風飲食器

中国向け製品の多くを占めた一般的な磁器製品の他に，西洋風の製品も輸出されていた。外務省通商局発行の『通商彙纂』1900年10月付の記事には，上海における日本製の珈琲茶碗についての記述の中で，「重ニ西洋人向ニシテ今ノ所支那人ニハ其販路ナシ」とある[21]。しかし，７年後の，1907年の井上の報告では，清国では珈琲茶碗の使用が盛んになり，華美なヨーロッパ製品が多く用いられるとある[22]。また，1908年の『大日本窯業協會雑誌』の記事には清国と朝鮮向けの陶磁器についての報告が載っており，そこには「本金物の花瓶，水差，香爐の類最も多く輸出せられ，近時兩國は日本を介して歐米文化の曙光に接せしかば，洋風の器具は上流社會の需要する所となり，爲に珈琲茶碗，其の他歐洲向の陶磁器は移て此の兩國に入る」[23]とある。つまりこれらの記録から，1900年から1907年の間に清国で本格的に洋風の陶磁器に対する需要が伸長したことがわかる。

清国における洋風食器への需要を検討する上で重要になるのが，ドイツ及びイギリス製陶磁器の清国市場進出である。1907（明治40）年の『大日本窯業協會雑誌』掲載の記事では「我國の陶磁器は今や清國市場に於て獨逸陶器と盛んに競争し」[24]とあるが，この分野の製品は欧米製品が日本製品に比べて実用的な上に壊れにくいとの理由から売り上げを伸ばしたらしい。同年の『通商彙纂』には中国各地での日本陶磁器の商況が報告されたが，上海・広州・天津に関する報告では，日本陶磁器がドイツ・イギリス製品にとってかわられているといった記事が

散見される[25]。

日本の一般的な陶磁器のほかに，清国と朝鮮は遅くとも1900年代初頭までには日本，及びヨーロッパ製の洋食器を本国人向けに購入するようになった。これは，上流階級の生活スタイルの変化がもたらした結果と説明されている。明治後期には日本製洋食器が欧米諸国に留まらず，清国を含めたアジア諸国にも販路を広げていた。しかしながら，日本製品がほぼ独占していた日用の食器類とは違い，こういった洋食器分野では安価なドイツ及びイギリス製品の進出が著しかったのである。

３－３．中国古陶磁の倣製品

第３の種類は中国古陶磁を写した高級陶磁器である。井上孝之助は先述の1905年の報告の中で清国の社会的階層の違いによる趣味の違いについて以下ように述べている。

> 花瓶に付ての嗜好は日本と殆んど其の趣を同ふす上流社會の愛骨董家には雅致なるものが排置せられ新出來紳士には精緻にして華美なるものが飾を付けられ商家の應接室料理屋妓樓等には粗製にして燦爛たるものが据えられて自然に其社會を表白して居る而して此の三段の嗜好に對し日本品は慥に支那人の意を得らるべし
>
> 支那人の上流社會には歐洲品は俗にして日本品は雅致なりと云ふとは常聞く所なり然して日本品華美なるもの優美なる者精緻なるもの皆支那品と相近似しぬ日本の粗製廉價にして金色燦爛たるもの亦下流の需要に適す[26]

清国では上流階級を含めたすべての社会的階層において日本陶磁器に対する需要が存在した。そして，日本と清国における陶磁器意匠に対する嗜好は似ており，特に上流階級にはヨーロッパ製品よりも日本製品を評価していたとする。

1895年の別の報告には，清国本土に輸入されるのは茶碗や湯呑といった一般的な製品が中心で，香港に輸入されるものは染付の花瓶や鉢といった玩弄物が多いとある[27]。ここから，どちらかといえば，日本製の高級陶磁器は香港，つまり南清方面に向けて輸出されていたと推測できる。

1903（明治36）年に日本各地を歴訪した清国の凌文淵は『籥盦東游日記』と題した日本滞在記を1906年に刊行したことで知られる。凌は大阪滞在時に第五回内国勧業博覧会を視察したが，その際目にした日本製の中国古陶磁の倣製品について興味深い意見を記している。凌は博覧会には日本製の康熙時代の青華磁器の写しが出品されており，そこで見た日本の倣製品の品質の良さと美しさは清国の製品を上まわっていたとの感想を述べている。続けて，清国高官

の報告として，日本の業者は景徳鎮で磁土を購入し，それを持ち帰って，加飾施釉して西洋向けに販売して巨利を得ているとし，それが中国磁器の販路を狭めているらしいと述べる。最後に，日本は以前から中国の古陶磁を収集，愛好し，現在はその智識を利用してよい作品を製作し益々発達していると述べ，清国磁器の利権を挽回するにはどうしたらいいのかと問題提起している[28]。清国人が手放しで認めてしまうほどに，陶磁器分野での日本の進出は，清国国内市場，欧米市場共に無視できないものとなっていた。更に，磁土を景徳鎮から輸入して日本で生産するというようなことが本当におこなわれていたとするならば驚くべきことである。

ここで挙げた資料の中で扱われている陶磁器は，いわゆる中国古陶磁の写しである。凌が指摘している通り，古来より日本では唐物が大変珍重されてきた。そして，18世紀末以降は日本陶工の技術も上り，精巧な唐物写しが多く制作されていたのはよく知られるところである。代表例として奥田頴川（1753–1811）とその門下の欽古堂亀祐（1765–1837），木米（1767–1833），仁阿弥道八（1783–1855）らの，当時の文人趣味を色濃く表した作品が挙げられるであろう。また，彼らや彼らの弟子達は全国各地の窯に赴き，技術指導をしたことでも知られている。そういった精巧な唐物写しの作品が少なからず清国に輸出されていたのである。

京都清水五条坂の陶工三代清風與平（1851–1914）は明治初期の京焼について語る中で以下のように述べている。

> 維新の前後なぞは，當地［京都］でも重に唐物の模造を致しましたので，夫は茶方より骨董の方が，よけいに甚うムいました。假令ば青磁でも，白磁でも，此方に立派なのが出來て無銘でムいますと，直に唐物として賣りますので。そうする方が價がよいものでムいますから[29]

三代與平は多くの京焼の陶家が唐物写しを制作し，それを唐物の骨董品として販売していたというのである。京焼の陶工，二代真清水蔵六（1861–1936）はこういった陶磁器は時に日本国外にもたらされ，中国古陶磁としてやりとりをされたと窯業界の回顧録『泥中庵今昔陶話』の中で述べている。

> 日本産の平戸焼（三河内折尾瀬村焼）の精巧な人形白瓷，人物置物も支那に渡つてゐる。又伊豫國砥部白瓷も，今から二十五年前迄は澤山に支那へ輸出して，支那内地邊鄙までも行き渡つたといふが，外國人も支那古物であると思ひ買取つた品もある。日本へ逆輸入のその白瓷も僅かにはあつた。日本の焼き損じ色變り均紅瓷が支那で古味をつけて，歐米に支那古物と化けて輸出したこともあり［後略］[30]

まず，平戸焼（三川内焼）や砥部焼の精巧な作品に関しては，清国に渡った後中国古陶磁であるとされたこともあったようである。ここにある，焼き損じの製品が清国にわたり古色をつけ欧米に輸出されていたという記述には驚かされる。蔵六は続けて述べる。

> 支那に行く物には蘇山氏の青瓷もあった。其の頃に村田といふ人，宇野といふ人[31] なども青瓷専門で，宇野氏の方が品物が支那似の強い方で，此の品に弗化水素酸といふ甚だしい劇薬で，硅水晶でも腐らせる薬品があるが，之でマジナイをすると昔の支那青瓷と同様に釉質が化ける。之に化學的の時代を付けて大阪の小見山といふ古物商が，支那人に賣り渡し，支那骨董店に陳列してあると支那人も買ふ，西洋人も買ふ，日本人も買ふ。品數としては支那へ輸出をした三分の一は日本へ逆輸入したといふ［後略］[32]

この記述を証明するかのように，近代の中国古美術商として知られた壺中居の創業者広田不孤斎（1897–1973）は買い付けで北京を訪れ始めた頃，真清水が説明するような京都産の青磁香爐を元代の天竜寺青磁として北京で仕入れてしまったことについて自著の中で触れている[33]。若い頃の話であると広田は述べるが，それにしても，先述の凌の言葉にもあるように，日本産の中国古陶磁写しの質の高さを証明する逸話であろう。

真清水蔵六が言及している初代諏訪蘇山（1852–1922）の青磁については，蘇山本人が無銘の唐物写しの作品を制作し，中国，朝鮮に販売したと認めている。

> 私は從來青磁は，支那朝鮮て賣つて，内地では殆んどさばきませんでしたが，それが日本へ入つて，何千圓，何百圓といふ高價になつてゐる。横濱の原富太郎氏などは，此私の製したのを，いくらも持つて居られます。また或る富豪が，安南から来たよい青磁を手に入れたから，參考の爲め見せてやらうといふことで，見せて貰ひましたが，之も私の製作でした。然し私は決して唐物だといふて，ウソついては賣らん，たゞ夫が支那朝鮮や，内地商人の手に渡つて高くなるので。それで或る人は，もつと價を高く賣るがよいと云ひますが，私は自分で樂しんだ滓だから，高く賣らんでもよいと云ふて居るのです[34]。

諏訪蘇山だけにとどまらず，唐物写しで名を馳せた京焼の陶工に共通する制作態度は，古陶磁を研鑽し，いかに歴史上の逸品に迫る作品を制作できるか否かであった。需要の下支えとして，日本人による中国古陶磁に対する絶えることのない憧憬と，その需要に対する中国陶磁の供給不足があった。勿論，中には精巧な贋物で利益を上げた陶工もいただろうが，諏訪蘇山や宇野仁松といった人々が活躍した時代は，いかに優品を再現できるかが重要な評価基準の一端

を担っていたのである。

高品質の古陶磁写しは，日本と清国両市場両方に向けて制作された。そして，時に中国古陶磁の真作であるとして取引され，日本に逆輸入されることもあった。こういった作品は統計資料に現れてこない場合もあっただろうが，少なからず清国に輸出されたのは間違いない。そして時にそれらは中国古陶磁として中国から再輸出された。それを証明するかのように，欧米や日本の中国陶磁器コレクションに含まれる作品には，その産地に疑問をもたされる作品が少なくないことも事実である。

おわりに

本論では，これまで日本美術と産業の西洋化，近代化の象徴として紹介をされてきた明治期の日本陶磁器の海外進出成功には，清国の陶磁器産業の長年の低迷が深く関わっていたことを明らかにした。清朝末期の度重なる動乱で，中国磁器の生産力が落ちていたところに，安価な大量の日本陶磁器が供給されたことが，産業としての明治期の日本陶磁器の成功の背景にあった。そして，その流れは景徳鎮の磁器その生産力を持ち直す明治末年頃までは続いたようである。更に，国内需要もまかなえない清国の磁器生産を見据え，日本磁器は積極的に清国向けに輸出された。清国向け輸出は対欧米のそれに比べ輸送費がはるかに安い。そして，器形や意匠に十分な配慮が必要な欧米諸国向けの輸出陶磁器と違い，元々国内向けに生産されていたものの中から，清国人の嗜好にあうものを選んで輸出が可能であるという魅力的な市場であった。

近年，展覧会・研究論文などで，ジャポニスムや万国博覧会研究とは異なる視点で近代陶磁器を扱った研究に注目が集まり始めている。しかし，日本とアジアとの関係を述べたものは未だ少ない。また，中国陶磁器に関する研究においても，近代に関する研究は未発達の分野であり，今後の研究の進展を切に期待するものである。

本論における検討の対象は文献資料を中心とした。その結果，日本陶磁器の大規模な清国向け輸出の存在を指摘するに至ったが，それを裏付ける規模の在中国コレクションの確認には未だ至っていない。これは，清国人が日本陶磁器を中国陶磁器と思って使用していたという記録や，日本で生産された中国陶磁器の写しが本物として流通していたという記録とおそらく関係があるのであろう。今後は，本論文を裏付ける現存作品の調査を課題としたい。また，今回は紙面の都合により，清国向けの日本陶磁器がどのようなルートで清国にもたらされたか，そして，どのような意匠の作品が清国向け製品として選ばれたのかについて触れることができなかった。これらの点については別の機会に明らかにしたい。

注

1　奈良本辰也『近代陶磁器業の成立』（日本学術論叢第五），伊藤書店，1943年，p. 37。

2　明治中期のアジア向け陶磁器輸出の伸びに関しては既に畑智子氏が指摘されている。畑智子「明治期の工芸品をめぐる輸出振興政策について」（『賀茂文化研究』第五号，賀茂文化研究所，1997年２月，pp. 43–48）。

3　「安政三年京都所司代久貝因幡守井上遠江守奉行浅野和泉守等陶器を歐州に輸出するの國利なるを談す青海氏之を賛し食器数千を製して江戸に送り之を歐州に輸出す是京都陶器の外國に輸出したるの始なり既にして國中攘夷の説盛んに起るを以て中絶す」（桜井敬太郎他『京都府下人物誌』金口木舌堂，1891年，p. 55）。

4　黒田譲（天外）『名家歴訪録 上』1899年，331頁。

5　京都貿易協会編『明治以降京都貿易史』京都貿易協会，1963年，p. 52。東京の博覧会事務局付属磁器製造所で伝習生として学んだ幹山伝七は，他の京都の陶家に先駆けて，1970（明治３）年より西洋顔料を使用して作品を制作している。（中ノ堂一信「明治の京焼 ── その歴史 ──」『明治の京焼』京都府立総合資料館，1979年，p. 14）

6　職工数は以下を参照。藤岡幸二『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会，1962年，31頁。総生産数は以下を参照。中ノ堂一信「明治前期の京都窯芸史料」（『京都府立総合資料館紀要』九号，1981年，pp. 52–105，p. 57）。

7　荒川巳次「天津における磁器商況」（『大日本窯業協會雑誌』第一集三號，大日本窯業協會，1892年，p. 67）。

8　北清地方への景徳鎮磁器の運搬の不便さについては「滿州の日清陶器比較」（『大日本窯業協會雑誌』第６集184號，1907年12月，p. 203）にも指摘されている。

9　内海吉堂「磁器製造販売私説」（藤岡前掲書，pp. 57–58）。本資料の原本は京都府立総合資料館蔵である。

10　藤江の他に陶磁器業関係者として派遣されたのは，岐阜県陶磁器組合代表加藤助三郎，長崎の窯業者北島榮助等である（「清國窯業の視察」『大日本窯業協會雑誌』第七集七四號，1898年，p. 56）。

11　「支那の輸出磁器について」（『大日本窯業協會雑誌』第七集八四號，1899年，p. 432–436，p. 433）。藤江の清国視察報告にはこの他にも以下がある。「清國景德鎭磁器視察報告」（『大日本窯業協會雑誌』第八集九二號，1900年，p. 274–283（『大日本窯業協會雑誌』第八集九三號，1900年，p. 305–314）。

12　『清史稿』には1728年から1735年に景徳鎮で陶務官を司った唐英の項に，雍正期の官窯では57種もの製品を制作していたと記述がある。（『清史稿』中華書局，1976年，pp. 11572–11573）。

13　北村弥一郎「清國窯業視察報告」（大日本窯業協會編『工学博士北村弥一郎窯業全集　第二巻』大日本窯業協會，1929年，pp. 257–406，p. 360）。

14　荒川前掲書

15　清世逸民「京都通信」（『大日本窯業協會雑誌』第14集161號，1906年９月，pp. 576–577，p. 577）。

16　井上孝之助「北清に於ける陶磁器の販路と日本陶瓷器の現状」（『大日本窯業協會雑誌』第一三集一四

九號，1905年１月，pp. 173–178，p. 174）。

17 「當港［天津港］ニテ本邦磁器ノ仕入ヲ為ス問屋ハ日本商店ノ外支那商寶祥順，萬聚魁，恒豈盛等數軒アリシカ往年ノ損失後多クハ輸入ヲ見合セ目下萬聚魁ノミ之ニ従事セリ萬聚魁ハ神戸長崎等ニ代理店ヲ有シ且ツ天津ニハ本店ノ外分店ヲモ設ケテ肥前，尾張製及江西製磁器竝ニ雑貨ヲ販售スルカ就中磁器ハ内地需要先ノ嗜好ヲ察シ時々見本ヲ本邦ニ送リテ製出セシムル」（荒川前掲書，p. 68）。萬聚魁は当時，日本事業者の天津市場進出の障害となっていたようで，これに先立つ1887年の『通商報告』には「萬聚魁ガ巧ニ立廻リ日本陶器ヲ廉價ニ販賣スル為メ我商ノ賣口ハ稍悪シキガ如シ」（外務省記録局「清國天津港日本産輸入品ノ商況」『通商報告』第39號，1887年10月，pp. 18–19，p. 19）との記述がある。

18 砥部焼には伊予ボールとして知られる印判での染付製品が残っており，砥部から中国に輸出されたものはこういった，製品が多かったものと思われる。（大内優徳『陶磁選書４：伊予の陶磁』雄山閣出版，1973年，pp. 155–6，p. 201）

19 北村前掲書，p. 368。このほかにも同様の報告がある。神戸市編『神戸港之外国貿易』神戸市，1913年，p. 88。

20 「支那の輸出磁器に就て」（『大日本窯業協會雑誌』第７集84號，1899年８月，p. 433）。

21 外務省通商局「上海ニ於ケル本邦雑貨」（『通商彙纂』第177號，1900年10月，pp. 16–23，p. 19）。

22 井上前掲書，p. 175。

23 「京都の陶磁器」（『大日本窯業協會雑誌』第16集188號，1908年４月，pp. 384–386，p. 385）。

24 「清國市場の我陶器」（『大日本窯業協會雑誌』第15集177號，1907年５月，p. 301）。

25 外務省通商局「本邦産陶磁器ニ関スル調査」（『通商彙纂』第52號，９月，pp. 8–12，p. 9），「上海ニ於ケル本邦陶磁器の需要状況」（『通商彙纂』第54號，1907年９月，pp. 2–7，p. 3），「天津ニ於ケル本邦陶磁器及競争品」（『通商彙纂』第61號，1907年10月，pp. 10–11，p. 11）

26 井上前掲書，pp. 175–176。

27 「磁器及陶器の輸出」（『大日本窯業協會雑誌』第４集37號，1895年10月，pp. 12–14，p. 13）。

28 「又有青花白質二種仿康窰可奪眞售出西洋獲重價夫我国工藝惟磁器甲地球今見日本仿製之品精美過我又前閲江西柯中丞奏議謂日商購景德磁胎帰製彩釉博西洋大利而阻中磁銷路云云又往年日本廣收中國古磁初以為供玩好今及知作標本其磁器発達日臻進歩我國磁器宜如何改良以挽利權乎」（凌文淵『籥盦東游日記』，1906（光緒二九）年，p. 14）

29 黒田前掲書，p. 27。

30 真清水蔵六『泥中菴今昔陶話』学芸書院，1936年，p. 179。

31 三代清風與平の弟子で，大正以後，陶磁器界屈指の陶技の持ち主として知られた宇野仁松（1864–1937）のことであると思われる。

32 真清水前掲書，pp. 180–181。

33 広田不孤斎『骨董裏おもて』ダヴィッド社，1957年，pp. 126–127。

34 黒田譲（天外）『一家一彩録』国書刊行会，1920，p. 135。